

# 稚内港北防波堤物語

平尾俊雄・土谷 実の合作

畑山義人

HATAYAMA Yoshihito

正会員

㈱ドーコン 技師長

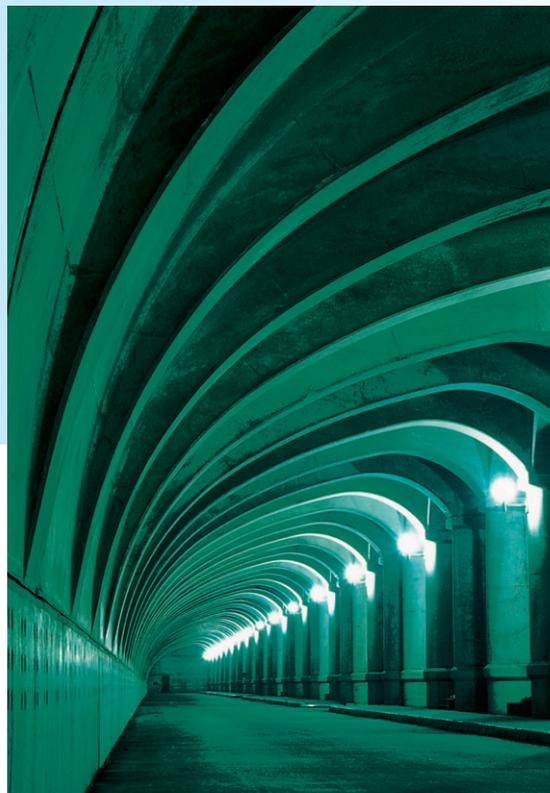


写真-1 ドーム内の夜景。梁が壁に吸い込まれてゆく

宗谷海峡を隔ててサハリンに対峙する重要港湾・稚内港。その北防波堤の427 m区間は、通称「北防波堤ドーム」と呼ばれる底の付いたユニークな防波堤になっている。このドームは1936（昭和11）年に建設され、隣接して整備された樺太航路用の岸壁とともに戦前はきわめて重要な役割を果たしてきた。戦後は利尻・礼文に向かうフェリーと、1995（平成7）年に復活を遂げた日口定期フェリーが発着する最北の玄関口として機能してきた。戦前に樺太航路の貨客が行き交った広場は、今さまざまな市民行事で賑わい、観光客が闊歩し、ドームの中は最北の地を目指して集まるライダーの野宿の場にもなっている。今やこのドームは稚内の歴史、風土を雄弁に語るシンボルとして世間に認知され、第一級の観光資源として新たな役割を担っているのである。

ドームの誕生から現在までを振り返り、実に幸せな土木施設だと思う。と同時に、このような地域貢献を果たす公共施設を提供することも私たち土木技術者の責務なのだという思いを強くする。ここではこのドームの成立と関わった技術者について述べ、現代の土木技術者が為すべきことを考えてみたい。

世に出ている資料のほとんどには、当時稚内築港事務所の26歳の技手、土谷実（1904～1997）が設計したと紹介されている。しかし、そんな若い技術者がどうやってこの仕事を成し得たのだろうか。また、なぜこのような造形に

なったのだろうか。土谷は91歳のとき（1995年1月）、筆者らにそのわけを詳しく話してくれた。

彼は北大の1期生、病気のため半年遅れて1928（昭和3）年10月に稚内に着任し、防波堤のケーソンの製作を担当していた。ひと月後、平尾俊雄と運命的な出会いをする。平尾は1916（大正5）年に東大を卒業し、廣井勇ゆかりの小樽築港事務所で伊藤長右衛門の薫陶を受け、その後網走築港事務所長として活躍中に稚内築港事務所長（兼務）として赴任してきたのである。

平尾は土谷に防波堤の胸壁を越える波の観測と海中に打設した木杭の腐食調査をやらせた。木杭は虫に食われていた。また、稚内特有の強烈な風と高波には+24尺まで直立したバラベツでも歯が立たなかった。平尾はその結果を見て防波堤に天蓋を設けることとコンクリート杭を使うことを決断した。そして1931（昭和6）年1月、土谷にこの防波堤の設計を2か月でやれと命じた。ただし、平尾はフリーハンドで絵を描き、天蓋をドーム状に示した。全体のスケールは越波の観察から平尾が判断したのである。

土谷は途方に暮れてしまった。なにしろ誰も経験がない形で、相談する相手もない。しかし、二つの幸運があった。ひとつは卒業論文でコンクリートアーチ橋を手掛け、アーチ橋の設計図書やドイツ語の参考文献をひもといた経験があったこと、もうひとつは大学時代の建築の講義（当時北大では道庁建築課長の福岡五一が土木の学生に建築学を教えていた）で強く印象に残ったギリシャ・ローマ建築



写真-2 岸壁からドームを望む

の講義資料を持っていたことである。彼は開き直って設計に没頭した。古代ローマの影響が感じ取れるドームの外観にはこのような事情があったのだが、アーチリブが徐々に壁面に埋もれていく納まりや、砕いた波を遮断するために設けられた最上部のしぶき止めのデザインからは、彼のただならぬ力量が感じられる。「意匠に関しては怖いもの知らずだったのが幸いしたようだ。後で型枠に泣かされたがね。もし、自分がいっばしの港湾屋に成長していたならば、こんな大変な意匠にすることはなかっただろう。土谷の感想である。

設計者は二人存在した。つまり、基本構想とその技術的なバックボーンは平尾によって固められ、詳細設計を土谷が担当したのである。平尾は土谷のユニークな造形に何ら注文をつけず、これを認めた。そして、これを実現すべく内務省を説得して歩いたのである。その際、責任者として設計に深く関わっていたにもかかわらず、彼は決して自分の設計とは言わなかった。土谷は晩年になって自分の名ばかりが出ることを気にして、「平尾さんと私の合作というべきなんです。平尾さんがいなかったら、あそこまで思い切ったことはできなかったと思う」と述べている。面白いことに、当時の土谷は庇の付いた防波堤が世にも珍しいものだとは知らなかったという。また、平尾は少しも褒めなかったで、自分の設計がどのくらい評価されているかもわからなかったらしい。土谷にとって12年先輩の平尾は大変こわい存在だった。しかし、平尾はその後本務が函館に移ったときに土谷を連れて行ったり、海軍の依頼で海南島の築港工事を指揮する際には土谷を引き抜いて補佐役に据えたりと、両者の縁は誠に深かったのである。平尾は土谷を高く評価していたし、土谷もまた新工法に先頭切って挑戦する平尾を心から尊敬していた。このドームは、長く師弟関係を続けることになる二人が知恵を結集して造った記念碑的な作品でもある。筆者は、土谷が望むように「二人の合作」と記したいと思うのである。

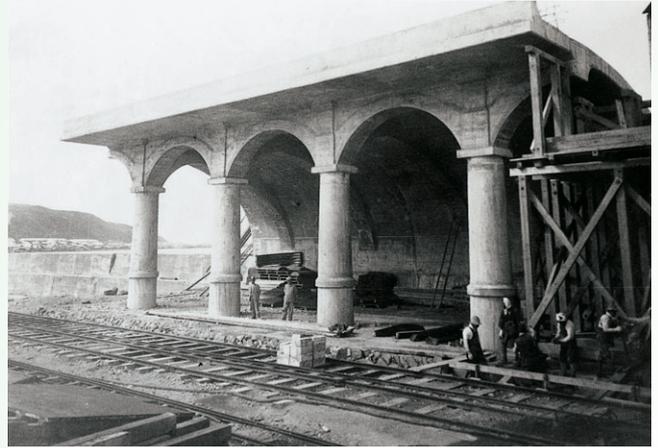


写真-3 1931（昭和6）年、最初のプロックの脱型。しぶき止めはまだ設けられていない（提供：土谷 実）

ところで、ドームは最初から名所だったわけではない。土谷によれば、1964（昭和39）年に毎日新聞がドームと土谷を大きく紹介し、これが契機となって観光ガイドブックや雑誌にたびたび登場するようになったらしい。その後、1976（昭和51）年に最大の転機が訪れた。ドーム内は石炭置場に使われていたが、塩害でぼろぼろに劣化し、取り壊されることになったのである。しかし、すでにこの建造物は稚内市のシンボルとして定着していたため、市民の熱心な働きかけにより、原型に忠実に復元されることになった。復元工事は1980（昭和55）年に完成した。

このように、地域の経済活動に貢献し続ける意匠に優れたインフラは、地域アイデンティティに少しずつ影響を与え、文化形成にひと役買うようになる。ドームはそのような水準に到達していたからこそ、こうして更新され、継承されたのである。機能を満足するだけでなく、地域文化の表現者としての幸せな土木施設の姿がそこにある。

さて、このような地域貢献を果たす公共施設をどうすれば提供できるのだろうか。あくまでも経済性を優先して性能を満たすだけの施設を提供するのでは、この水準のものはなかなか誕生しないだろう。あの土谷も、技術者として経験を積んだあとにあのような造形を行うことは二度となかった。ドームを実現させたのは、経験豊かな平尾の慧眼と指導力、行動力なのである。

いま、公共事業は市民から厳しい目で見られているが、市民は「安く造れ」ではなく「税金を無駄にするな」と主張しているのだと思う。本来、土木はインフラの提供を通じて地域の環境や文化の形成に深く関与する職能である。安く、安くの大合唱に合流するのは、土木技術者が本来担うべき責務を放棄しているような気がしてならない。

平尾俊雄に惹かれた。こんな上司になりたいものだ。これが筆者の稚内北防波堤物語である。